

モトモイサツ 基腐病 防除の今

②

9月から2024年産の苗の準備が本格化する。畑に菌を持ち込まないためには健全な苗づくりが重要だ。鹿児島県内では22年産から蒸熱処理装置Ⅱ写真Ⅱを活用し、苗を採るための種芋を消毒する新たな技術の導入支援を始めた。

種芋を一定時間、48度

「蒸熱」で健全種芋確保



で蒸熱処理することにより、基腐病もとむろびょうの発生リスクが軽減されることが分かった。

今回は、地元農協が処理装置を導入したのを機に、23年産から蒸熱消毒を始めた南九州市の生産者を紹介する。

この生産者は翌年の苗

を採るため、収穫した種芋を貯蔵している。基腐病が発生して以来、見た目がきれいでも貯蔵中に半分近くが腐ってしまった。苗の確保が困難になっていた。

種芋の蒸熱処理は初めてで不安もあったそうだが、23年産用は貯蔵中の腐れが減り、育苗床での基腐病の発生もなかった。今は収穫作業の最中で、品種によっては県平均を大きく上回る10kg当たり3・5トの収量が見込める畑もあるという。

県内の22年産の収穫量

は、基腐病を初確認した18年産以降で初めて増加に転じ、21万トに回復した。23年産も現時点では昨年並みに順調に生育している。先の生産者は蒸熱処理の効果を実感し、24年産も近隣の生産者と共に健全苗の確保に取り組み、地域ぐるみで基腐病を克服していきたいと話していた。

蒸熱消毒処理に関心のある生産者は、地域振興局・支庁や県庁農産園芸課に問い合わせを。

(鹿児島県農産園芸課・西原悟) Ⅱ偶数月に掲載